

政権を安定させた亡命 -- 1990年代イラクの体制内 抗争と支配の制度化（特集 亡命する政治指導者た ち）

著者	山尾 大
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	13-16
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003772

政権を安定させた亡命

——一九九〇年代イラクの体制内抗争と
支配の制度化——

山尾 大

●突然の亡命

一九九五年八月七日深夜、イラクの首都バグダードから隣国ヨルダンへと続く砂漠のハイウェイを通って、イラク政府高官とその家族一五名が、ヨルダンへ亡命した。これは、イラクとヨルダンの両政府にとって突然の出来事であった。

男の名はフセイン・カーミル・マジード。イラク陸軍大将で、石油相も兼任していた彼は、 Saddam・フセイン大統領の娘婿としてイラクの軍事産業を統括し、精鋭部隊である共和国防衛隊の司令官も務めた。国軍と特殊部隊を指揮し、大統領の寵愛を受けてきたカーミルは、湾岸戦争後には石油省をもその支配下におき、絶大な権力を掌握したのである。一九九〇年代のイラクにおいて、カーミルは間違いなくトップ三に入る

権力者であった。

その彼が、突如として亡命したのだ。しかも、フセイン大統領の実際の娘と政府高官を引き連れて。この亡命はイラク政府を震撼させた。

というのも、大統領の娘や孫が亡命したという事実に加えて、カーミルがイラク政府による大量破壊兵器の開発にかかわる国家機密をすべて握っていたからである。湾岸戦争後、経済制裁下にあった当時のイラクでは、国連特別委員会（UNSCOM）の査察が行われており、カーミルが亡命先のヨルダンで大量破壊兵器の隠蔽にかかわる機密を暴露することを恐れたのである。

カーミルは、なぜこの時期にヨルダンに亡命したのだろうか。本稿ではその理由を探るとともに、亡命後にどのような活動を行

い、そして亡命がなぜ失敗したのかを考えたい。また、亡命の分析を通して、フセイン政権の支配メカニズムがどのように変化していったのか、という問題も議論の俎上に挙げたい。

●親族の支配とカーミルの台頭

はじめに、カーミルの権力基盤を瞥見してみよう。一九五六年にイラク北西部のティクリートにある寒村で生まれたカーミルは、一九七七年、当時副大統領であったフセインの従兄弟で、カーミルの叔父にあたるバルザーン・イブラーヒームを頼ってバグダードに上京した。バルザーンは当時、ムハーバラトと呼ばれる秘密警察の長官であった。カーミルは叔父のもとで諜報活動を行うようになった。

一九七九年にフセインが大統領

に就任すると、カーミルは出世街道を直走することになった。陸軍大尉に昇進し、大統領護衛部隊の長官に任命されたカーミルは、一九八三年に大統領の長女ラガドと結婚し、五人の子供をもうけた。弟のサッダーム・カーミルも大統領の次女リーナと結婚した。

フセイン大統領の娘婿になったカーミルは、一九八七年に軍事産業を統括する軍事産業委員会の委員長に起用された。そして、大統領護衛部隊をイラク最強の精鋭部隊と名高い共和国防衛隊に再編し、司令官に就任した。その後、イラン・イラク戦争中に軍事産業を発展させた功績が評価され、カーミル率いる軍事産業委員会は工業兼軍事産業省に昇格した。こうして一九八〇年代後半以降、大量破壊兵器の開発を中心とした軍事産業は、カーミルの支配下におかれるようになった。

一九九〇年代には、国連の経済制裁と「食糧のための石油輸出」計画のもとで、カーミルは石油相という新たな基盤を獲得した。さらに経済制裁下では、石油の密輸や支援物資の横流しなどを行う新興ビジネスマンが台頭したが、カーミルはそれを束ねる役割を果

たしたのである。

こうして、軍事産業と特殊部隊を基盤に、闇経済をも支配下におくようになったカーミルは、兵器の開発や密売、石油の密輸から莫大な資産を獲得し、大統領の親族という地位を利用して絶大な権力を恣にした。一時はフセイン大統領の後継者とも噂された。

カーミルの台頭に代表されるように、フセイン政権は一九九〇年代半ばにかけて、親族を政権の重要ポストに登用することで、支配を強化してきた。

それにはもちろん理由があった。というのも、八年間に及ぶイラン・イラク戦争、一九九〇年の湾岸危機、翌年の湾岸戦争で国が疲弊したところに、「三月蜂起」と呼ばれる反体制暴動が起こり、体制が極度に不安定化したからである。国外では亡命反体制諸派が欧米諸国と協力体制を構築してフセイン政権の打倒をはかっていた。それに追い打ちをかけたのが、一九九五年五月に発生した部族の反乱であった。共和国防衛隊の高級将校を輩出してきたドゥライム部族が、フセイン政権に反旗を翻したのだ。ドゥライム部族の反乱は、ジュブリーやシャンマルな

ど他の有力部族の反乱をも、もたらした（参考文献⑤）。こうした国内の大きな混乱に直面したフセイン政権は、親族を政権の中核に登用することによって、政権の基盤を固めようとしたのである。そのために政府高官に起用された親族は、概ね三つの勢力に分けられる。

第一に、フセイン大統領の母方の義理の従兄弟に当たるイブラーヒム家である。長年秘密警察の長官を務めたバルサーン、「三月蜂起」で南部の弾圧を指揮したサブアウイー秘密警察長官、彼らの弟で大統領側近のワトバーン内相らが有名である。

第二に、フセイン大統領の父方の従兄弟に当たるマジード家である。一九八八年に毒ガスをもちいてクルド人の反乱を弾圧したアリー・ハサン国防相がその筆頭だ。これ以降、ケミカル・アリーとして知られることになった彼は、「三月蜂起」では共和国防衛隊を率いて北部の反乱軍を弾圧した。本稿の主人公、カーミルもマジード家の一員である。

第三に、長男ウダイと次男クサイという、大統領の二人の息子である。

●なぜ亡命したのか、なぜヨルダンなのか？

ところが、これらの三つの勢力間のパワーバランスは、次第に崩壊に向かった。大統領の息子、とくに一九六四年生まれの長男ウダイが、この時期に権力を拡大していったからである。ウダイは、オリンピック委員会委員長としてスポーツ界を、『バービル』紙や『シャバーブ・テレビ』の主幹としてメディア界を、それぞれ支配した。

ウダイは、少年期からその暴力的な性格で有名であり、父の側近を殺害するなど、様々な問題を起こしてきた。毎晩のように泥酔しては暴力事件や女性への暴行を繰り返すなど、ウダイの暴挙にまつわる噂は枚挙に暇がない。一般の国民にとってウダイは恐怖と嫌悪の対象であり、父にとつても頭痛の種であった（参考文献①）。

ともあれ、このウダイが、イブラーヒム家やマジード家の人々を権力の座から引きずり下ろし、大統領の後継者として権力基盤を固めようとしたのが、一九九〇年代であった。ウダイと対立した政府高官は、暗殺を含むあらゆる手段によって排除された。ウダイは、『バービル』紙の社説でワトバー

ン内相やサブアウイー長官への攻撃を繰り返した。

かくして、両家には次第に凋落の兆しが見え隠れするようになっていった。一九九五年五月、ドゥライム部族の反乱の責任を取ってアリー・ハサンが国防相を解任され、六月にはワトバーンが内相を解任された。

こうしたなか、親族のなかで唯一政府高官に留まっていたのは、カーミルであった。当然、ウダイはカーミルの支配する軍事産業にも目を付けていた。カーミルは当時、東欧の企業と武器購入の契約を進めていたが、ウダイはそれに割って入り、軍事産業を乗っ取るうとした（参考文献①）。親族のメンバーが次々とウダイによって失脚させられるなか、次にウダイの標的となったカーミルは、亡命を決意したのである。

その判断が正しかったことは、カーミルが亡命したまさにその日、イラン・イラク戦争勝利の記念祝賀会で泥酔したウダイが発砲し、ワトバーンの両足に重傷を負わせた事件によって明らかになった――発砲理由は、ワトバーンの息子とウダイの側近が口論になったこと、ワトバーンがウダイの悪

口を言ったことなど、諸説ある。すでに亡命の途にあったカーミルは、この惨事に居合わせずにすんだ。

亡命という決断の背景には、失権への懸念に加えて、他にも積極的な目的があった。

それは、大量破壊兵器についての情報を国際社会に暴露することによって、フセイン政権崩壊後のイラクで復権をめざす、というものであった。当時のイラクでは、UNSCOMが、湾岸戦争停戦決議（安保理決議六八七号）で規定されたイラクの大量破壊兵器（生物化学兵器やミサイル）を没収・廃棄するための査察を行っていた。大量破壊兵器の完全破壊が経済制裁解除の条件とされていたのである（参考文献②）。だが、イラク政府はUNSCOMの査察を巧妙に掻い潜り、様々な兵器を隠蔽してきた。一九八〇年代以来、軍事産業を一手に担ってきたカーミルは、こうした大量破壊兵器の開発と隠蔽をめぐる一連の国家機密をすべて握っていた。ウダイの台頭によって権力を喪失する前に、国際社会に機密情報を暴露して、もう一花咲かせてやろうというわけだ。

では、なぜヨルダンなのか。それにはもちろん理由があった。ヨルダン王室は、長らくフセイン政権と良好な関係を維持してきた。それは、ヨルダンにとってイラクが最大の市場であり、国内でフセイン大統領の人氣が高かったためである。湾岸戦争中にフセインがイスラエルにロケット弾を撃ち込んだとき、人口の大半を占めるヨルダンのパレスチナ人は狂喜した。

だが、ヨルダンは、一九九四年にイスラエルと和平協定を締結すると、経済制裁下におかれたイラクを支援するよりも、親米国家としての道を模索するようになった。長年にわたりイラクと密接な関係を維持してきたヨルダンが、亡命の直前に敵国となった。だからこそ、カーミルは亡命先にヨルダンを選び、ヨルダン国王も亡命を受け入れたのである。

●亡命後の活動とその失敗

ヨルダンに着いたカーミルは、ヨルダン王室に政治亡命を要請した。これは、ヨルダン政府にとっては寝耳に水であった。亡命の事実が知れ渡ると、バグダードはお祭り騒ぎになった。独裁者の親族

に生じたこれほどまでの激しい仲間割れに、人々は興奮し、祝杯をあげる者まで出た（参考文献①）。対照的に、イラク政府は慌てふためいた。大統領の二人の娘と共に、大量破壊兵器にかかわる機密情報が漏れたからである。

だからこそ、亡命直後には、カーミルは世界中の注目の的となった。亡命から四日後、彼は早くもUNSCOMと会談し、フセイン政権の国家機密をすべて暴露した（参考文献③）。イラク政府が国連の査察を掻い潜って大量破壊兵器を所有していること、実際に破壊したのはイラク政府が所有する兵器の一部でしかないこと、などが明らかになった。UNSCOMに加え、CIAや世界中のメディアが彼のもとを訪れた。

だが、それもつかの間のことであった。カーミルを訪問する者は次第に少なくなり、亡命から半年も経たないうちに、ほとんどいなくなつた。次第に暇を持て余すようになったカーミル一家に対して、義理の母（つまりフセイン大統領の妻）から帰国を促す電話が入った。イラク政府は、彼に対して、安全な帰国を保証するという。それならばと、一九九六年二月一

九日、カーミルはフセイン大統領に帰国を要請する正式な書簡を送った（参考文献①）。

なぜ亡命は八月月弱の短期間で幕を閉じたのだろうか。そこには大きく三つの理由があった。

第一に、亡命反体制諸派が、カーミルとの協力を拒否したためである。反体制諸派にとって、カーミルはあまりに長く政権中枢にいた人物であり、弾圧や人権侵害に加担し過ぎていた。そのため、欧米諸国と協力体制を構築し始めていた反体制諸派によって、カーミルは無視された。

第二に、カーミルが当初期待していたほどには、米国をはじめとする国際社会が彼を重宝しなかつたためである。米国はカーミルを完全には信用せず、国連も大量破壊兵器にかかわる重要な情報を聞き出した後は、彼をそれ以上必要としなくなつたのである。

第三に、ヨルダン政府がカーミルを厄介者扱いし始めたことである。当時、イラク亡命反体制諸派の拠点の一つとなっていたヨルダンにとっても、フセイン大統領の実際の娘を抱えておくには、荷が重すぎた。これ以上イラクとの対立を望まなかつたヨルダン王室に

とって、カーミルは交渉カードというよりは、お荷物になった。

こうして、権力の中核に返り咲くというカーミルの目的は潰えた。期待どおりの扱いを受けなかったことが、反対に大きな不満を生んだのである。そのためであろうか、非常に理解し難いことだが、カーミルは身の安全を保障するというフセイン大統領の言葉を信じ、二月二〇日、イラクに帰国した。

だが、そこに待ち受けていたのは死以外のなにもでもなかった。二日後、ウダイの『バービル』紙が大統領の二人の娘とカーミル兄弟の離婚を報じると、その日のうちに大統領の娘と孫を除くカーミル家の全員が惨殺された。惨殺の指揮を執ったのは、カーミルと同じマジード家のアリー・ハサン元国防相であった。大統領の娘は意に反してヨルダンに連れて行かれた、と報道された。いうまでもなく、カーミルには、フセイン政権を裏切った罪人としてむき出しの罵倒が浴びせられ、石油相他すべての公職を解任されるとともに、バアス党を除名された。

●強化されたフセインの支配体制

フセイン大統領の後継者と目された男の亡命。これはイラク政治にどのような影響をもたらしたのだろうか。

まず、UNSCOMとの力関係が一時的にはあるが、逆転した。カーミルが提供した情報によって、VX神経ガスなどの生物兵器の開発が予想以上に進展していること、これまでの査察が巧妙に妨害されてきたことを知った国連は、それ以降、査察を完全抜き打ち方式に転換した。その結果、多くの兵器が発見・破棄され、一時的に国連が優位に立った(参考文献④)。イラク政府は、これまでの妨害工作の責任は、他でもないカーミルにあると批判しつつ、査察に協力姿勢を示すようになったのである。

次に、二四年間で最大の危機に瀕していたフセイン政権を立て直すために、二つのことが行われた。

第一に、フセイン政権の正統性を担保するための諸政策である。フセイン大統領は、一九九五年一月に国民投票を行い、九九・九%という信任を獲得した。そして、イラクの指導者として、フセイン

大統領を神格化する動きが急速に進められた。

第二に、親族を中心とする支配から、バアス党や他の国家機構をもちいた制度的な支配体制へと、大きく舵を切ったことである(参考文献⑤)。フセイン大統領は、カーミルの亡命事件以降、重要ポストへ親族を登用することを止め、党幹部や官僚機構、そして軍による制度的な政治運営を進めるようになった。この傾向は、一九九六年一月にウダイが暗殺未遂に遭い、失権したことによって、加速された。他の親族が政権中枢から排除され、後継者が次男のクサイに一本化されることによって、親族内の抗争もなくなった。

かくしてカーミルの亡命は、親族に過度に依存した支配体制の負の側面を露呈させる結果となった。政府高官に起用された親族のあいだの対立が、フセイン政権最大の危機を生み出したからである。

だからこそ、フセイン大統領を最高指導者として神格化し、それを支える党と国家機構の制度的支配が復活した。その結果、イラク政府を震撼させたカーミルの亡命は、皮肉にも、フセイン政権後期

の支配を安定させる最大の契機となったのである。

(やまお だい/九州大学専任講師)
《参考文献》

①Cockburn, Andrew and Patrick Cockburn 1999. *Out of the Ashes: The Resurrection of Saddam Hussein*. New York: Harper Collins Publishers.

②Graham-Brown, Sarah 1999. *Sanctioning Saddam: the Politics of Intervention in Iraq*. London, New York: I.B. Tauris.

③UNSCOM報告書 (<http://www.downingstreetmemo.com/docs/unscom950822.pdf>).

④酒井啓子「二〇〇二」『イラクとアメリカ』岩波新書。

⑤酒井啓子「二〇〇三」『フセイン・イラク政権の支配構造』岩波書店。